

信頼される助産婦を目指して

国立大分病院

三浦喜美代

野田さん、「りれ一随筆」への御紹介どうもありがとうございました。お元気そうな声を聞いて、学生時代をなつかしく思い出しました。主婦として、2児の母として毎日頑張っているにもかかわらず、野田さんのまた助産婦として働きたいという強い思いに、私も随分励まされました。

貴重な経験

学生時代は、本当に実習に明け暮れた毎日だった気がします。待機室で眠れぬ夜を過ごしたこと、微弱陣痛の産婦さんにまる一昼夜付き添っていたことなど、そのときは、辛い、きついと思ったことも、「あのとき生まれた子供も幼稚園に通っています」といった手紙を受け取ると、ありがたさ、うれしさと同時に、本当にいい経験ができたという思いで一杯になります。

就職して今の病棟で働き始めて、今年で6年目。分娩介助例数は、決して多くはないのですが、1例1例を大切にしていこうという思いは、今も変わりありません。

私が長女を産んで育児休業から復帰して間もない頃、初めて死産の産婦さんを受け持ったことがありました。婦長さんに担当を告げられたものの、泣きじゃくる産婦さんや家族を前に、自分自身が戸惑うばかりでした。「両親、家族の期待と愛情を一身に受け、数週間後には元気な産声をあげるはずだった赤ちゃんがなぜなの？」と、言葉にこそならないものの皆同じ気持ちでした。辛い陣痛に堪え、分娩を終えた瞬間、彼女は「ワァーッ」と声をあげ、後はずっと眼を閉じたままです。

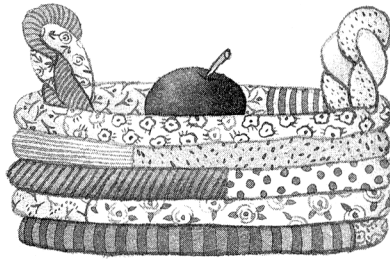
た。それから退院までの間、私自身も訪室しづらい日が続いていましたが、退院指導の際、彼女のほうから、今回の妊娠のこと、赤ちゃんのこと、元気で生まれていたらこんなふうに育てたかったなど、せきをきったように一気に話してくれました。一生懸命話してくれる彼女を前に、逃げ腰になっていた自分の弱さが情けなくて仕方ありませんでした。入院中、もっと正面から、彼女と話すべきだったと悔やんでいましたが、退院の日、「お産するのは怖くなかった。今度は子供を産みに来ます」という言葉に救われる思いでした。その後、今後のことや体調の変化のことなどで、何度か相談を受けましたが、今では元気に社会復帰されているとのことでした。

子供を失った母を支えるのは、夫であり家族であると共に、私たち助産婦も、その人にとって身近で、最も頼りになる援助者とならなければいけないと思いました。

信頼される助産婦として

私の働いている病棟は、定床30、婦人科と他科の患者さんも入院され、分娩自体は多くありません。限られた条件の中で、少しでも妊産婦さんたちのニーズに応えようと、スタッフ一同協力して、助産婦外来、夫立ち合い分娩、母児同室による母乳育児の確立、乳房外来の開設に取り組んできました。現在も試行錯誤を繰り返していますが、どれもが女性が母になるための大切な援助の一つだと思い頑張っています。

核家族化が進み、一昔前は当たり前のように行



なわれてきた出産・育児が、今では、一大イベントのようになっています。20～30年前にお産をして子育てをしてきたはずの人たちでも、育児を自分の子供に継承できない人もいます。若いお母さんは身近に相談する人がみつかりにくいようです。「お乳を吸いません」「布団に寝かせるとすぐ泣きます、どうしたらいいのですか」。このような電話相談も少なくありません。お母さんたちが、道に迷わないよう、しっかりとサポートできる助産婦にならなければなりません。病院という施設の中で、しかも、1週間という短い期間で十分な関わりを持ち、信頼関係をもつことは大変なことですが、地域に戻ったお母さんたちが、自信を持って育児できるよう、援助したいと思います。

講演会などで開業助産婦さんたちの話を伺う機会が何度かありましたが、70歳前後の助産婦さんたちの話を聞いていると、昔ながらの伝統的な助産ケアのコツや技など、もっと学び、お母さんたちの援助へつなげたいと思いました。

2人目の出産を前に

私は現在妊娠8か月。「もう生まれるの?」「もうすぐ産休ですか?」と、予定日近くを思わせるような大きなお腹を抱え、スタッフ、家族に、時には患者さんにも励まされながら、病棟勤務を続けています。1人目のときは、切迫流・早産で入退院、自宅安静を繰り返したものの、結局、予定日を過ぎてのお産でした。陣痛そのものも、本当に痛かったのは、8～9時間でしたし、中学校以来の同級生と一緒に働いている中村さんに介助し

てもらい、夫と家族に付き添われ、安心してお産ができました。妊娠中は、「本当に助産婦?」と言われてもおかしくない程の著しい体重増加と、中毒症、貧血……と、自分自身の意志の弱さを体で感じた10か月でした。その妊婦が産婦となり、たった一つほめられる点といえば、母乳で子育てをしたことでしょうか。1～2か月は多乳気味で苦勞しましたが、あとは、子供がよく飲んでくれて、お陰で私のダイエットにも役立ちました。しかし、職場復帰や、義母へ子供を預けることを考え、11か月で断乳。私の心配をよそにあっさりと断乳が終わり、母乳を通してつながっていた子供が離れていったようでとても寂しく感じました。

長女も2歳になり、女の子とは思えないほど活発に育っています。最近では「赤ちゃんおはよう、何食べているの?」と、お腹の子供の存在を少しずつ受け入れているようです。

母乳を通じて、親から子へ伝わるものは、真心とか、愛とか、生きる意欲などたくさんあるといわれています。長女や生まれてくる子供が、それらをどれだけ受け取ってくれるかは分かりませんが、一生のうちで数か月しかない母乳育児のときを、大切にしていきたいと思います。

今回は、助産婦学校時代の同級生で、東京に住んでいる池部朋子さんにバトンタッチします。

彼女の穏やかな性格と心の広さは、実習で悩んだり、落ち込んだりしたときの私にとって、本当に支えとなりました。

現在、家庭で子育てをされていますが、またお産をとりたいという思いが強いようです。